

中国紀行記

—中国政府日本教職員招へいプログラムへの参加を通して学んだこと—

The Chinese Tour

— What I Learned through Participating in an Invitation Programme for Japanese Teachers to China —

書道科 荒井一浩

1 中国への想いと本稿の趣旨

書道に関わる者にとって、やはり中国は特別な国である。憧れながらも、どう頑張ったって越えられない壁がそこには存在する。日本がいくら先進国だと言っても、悠久の歴史の流れの中ではつい最近のことでしかない。日本は中国から教えられて教えられて今の国家の基盤を作ったといっても言い過ぎではあるまい。もちろん、歴史にたられれば禁物であるのであろうが、中国から文字が、漢字が伝来しなかったらと考えるだけで、その先の思考が停止し、すべてが崩壊する。

その中国には、今から18年前に初めて訪れることができた。北京、洛陽、西安、上海とめぐったのだが、当時の中国の印象は日中国交回復からしばらくの時を過ぎたとはいえ、まだまだ日本からの旅行者は多いとはいえなかった。恋焦がれた恋人との逢瀬を連想させる洛陽郊外の龍門石窟や西安の碑林などに訪れた際には時が止まったかの感覚をえたのはまさに事実だ。しかし、首都北京にしても表向きは近代都市に変貌しているという印象を受けたが、一歩足を路地に踏み入れれば、その格差に驚いたものだ。

今回の訪中は、18年という時を経たというだけでなく、北京オリンピックを2ヵ月後に控えた時期ということもあり、街がどうなっているのか、パスポートを投げよこすその気質がどうなっているのか、友誼商店でしか買い物もできない治安はどうなっているのか、などなどさまざまな興味を抱いてのものであった。

今回感じた中国は、18年前と何もかもが変わったという印象だった。北京国際空港は昔の面影はなかった。パスポートも手渡しされた。街に出れば、ほとんど東京にいるときと同じようにどこでも自由に買い物もできた。にもかかわらず、私のにとっての中国は変わらずにあくまで中国であった。おそらくそれが、非常に情緒的にはなるが、中国の中国たるゆえんであって、歴史が持つ力だと思う。

本稿では、現在の中国を、そしてその基礎教育（初等中等教育）事情を、感じたままにあくまで主観的に記録

しておきたいと思う。それしかできないということもあるが、そうすることが、客観的に記そうとする過程でのゆがみを極力排除することができるし、読まれる方々にとってより現状に近い姿を提供できるのではないかと思うからである。

2 ACCU とその活動

ACCU はユネスコ・アジア文化センターの略称であり、今回の訪中を企画し、サポートをしていただいた組織である。その組織の概要を ACCU のホームページから引用する。

ACCU の使命

ユネスコ・アジア文化センター（ACCU : Asia/Pacific Cultural Centre for UNESCO）は、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の基本方針に沿って、アジア太平洋地域諸国の文化の振興と相互理解に寄与することを目的に日本政府と民間の協力によって設立された財団法人です。

ACCU は、1971年（昭和46年）4月に発足し、同年7月には、1969年3月以来アジアの図書開発活動に積極的な役割を果たしていた財団法人ユネスコ東京出版センター（TBDC）を合併し、現在に至っています。

ACCU は、ユネスコと緊密な連繋を図りながら、アジア太平洋地域ユネスコ加盟国と協力して、文化協力、教育協力、人物交流の分野で、現地のニーズを反映した具体的な地域協力事業を数多く推進しています。

今回の訪中は、上記の人物交流事業の中の ACCU 国際教育交流事業によるもので、日本政府の拠出金により国際連合大学が実施する「日本国際教育交流プロジェクト」の主旨に沿って、2002年度から実施されているものとなる。

2007/08 年中国政府日本教職員招へいプログラム（日本教職員派遣）

日次	月日(曜)	地名	現地時間	交通機関	予定	食事
1	2008年 6月14日 (土)	各地 都内(新宿)	朝 14:00-16:30 18:00-20:00	航空機 又はJR	各地より東京へ 新宿ワシントン新館3階「高尾1」にて朝エン テンション ※ロの字スタイル 同ホテル内新館4階「丹沢1」にて懇談会 ※ビュッフェ	昼: × 夕: ○
2	2008年 6月15日 (日)	都内(新宿)発 東京(成田)発着 北京 北京	朝 09:10 11:35 12:30 13:30-17:00 17:30-18:30 18:30-19:30	専用バス CA422	成田空港へ ※朝食は軽食(バス車内にて) 空路、北京へ 北京首都国際空港到着 空港から市内へ出発 視察(天安門、故宮) ホテルチェックイン 夕食(教育部招待) <北京泊>	朝: ○ 昼: 機内 夕: ○
3	2008年 6月16日 (月)	北京	07:00-07:50 08:00 08:30-09:10 09:10 09:30-10:00 10:00-10:30 10:35-11:15 11:20-11:30 11:30-12:00 12:00-13:30 13:40 14:00-14:35 14:40-15:25 15:30-16:00 16:00-17:20 17:30-18:10 18:20 19:00-20:40 21:00-22:00		朝食 教育部へ出発 教育部表敬訪問 出発 北京市月壇中学訪問歓迎セレモニー 学生により昇旗儀式 日本語授業を見学(3グループ) 記念撮影 学校内見学 昼食(烤肉苑にて) 出発 北京市35中学訪問、歓迎セレモニー 中学授業見学 高校部門へ移動 金帆学生民楽団演目 夕食(35中学食堂) 出発(ホテルへ) 京劇鑑賞(前門梨園劇場にて) 視察報告会①(ホテル会議室6037) <北京泊>	朝: ○ 昼: ○ 夕: ○
4	2008年 6月17日 (火)	北京 西寧着	07:30-08:20 08:30 09:00-10:00 10:00-11:30 12:00-13:30 13:30 15:10 16:55 19:35 20:35-21:00 21:00	CA1213	朝食、ホテルチェックアウト 出発 視察(魯迅紀念館) 視察(西単商業街) 昼食(民族飯店にて) 空港へ向けて出発、途中オリンピック クメイン会場見学 空港(T3)へ到着 空路、西寧へ 西寧空港到着 ホテルへ移動、チェックイン 夕食(和為貴廳) <西寧泊>	朝: ○ 昼: ○ 夕: ○
5	2008年 6月18日 (水)	西寧	07:30-08:20 08:30 09:00-10:30 10:30-12:00 12:00-13:30 13:50-16:00 16:20-17:30 18:00-20:00		朝食(1階餐廳) 出発 西寧市教育局と座談会(西寧三中に て) 西寧市第三中学訪問、見学 昼食会(西寧三中招待、伊爾頓酒店) 行知小学訪問 特殊教育学校訪問 夕食会(西寧市教育局招待) <西寧泊>	朝: ○ 昼: ○ 夕: ○

2007/08 年中国政府日本教職員招へいプログラム（日本教職員派遣）

6	2008年 6月19日 (木)	西 寧	07:30-08:10 08:20 09:00-11:00 11:00-12:00 12:00 13:20-16:00 16:00 18:00-19:30		朝食 互助県に向けて出発 互助県民族中学訪問 昼食（互助県教育局招待、土族風情園） 出発 林川郷水洞小学訪問 西寧市内へ向けて出発 夕食会（青海省教育庁招待） ＜西寧泊＞	朝：○ 昼：○ 夕：○
7	2008年 6月20日 (金)	西 寧	08:00-08:40 09:00 12:00 15:00 18:00-19:30 20:30-21:30		朝食 青海湖へ向けて出発 視察（青海湖） 湖畔で昼食（海北川金銀灘） 西寧市内へ出発 夕食（青海省教育庁国際処招待） 視察報告会②（ホテル2階会議室） ＜西寧泊＞	朝：○ 昼：○ 夕：○
8	2008年 6月21日 (土)	西 寧 上 海	07:30-08:30 09:00-10:20 10:30 11:10 12:35 15:35 16:30 18:00-19:30 19:35-21:30	CZ6881	朝食、ホテルチェックアウト 視察（小島基地） 出発 空港到着 空路、上海へ 上海浦東国際空港到着 ホテルへ移動、チェックイン 夕食会（上海教委招待） バスで外灘を通り、ホテルへ ＜上海泊＞	朝：○ 昼：機内 夕：○
9	2008年 6月22日 (日)	上 海 上 海 発 日本（各地）	06:00 06:30 07:30 09:15 10:10 10:35	CA921 CA929 CA405	チェックアウト 空港へ向けて出発（バス社内で食事） 空港到着、帰国は各地へ（チェックイン後、解散） 大阪（関空）へ（12:15着） 東京（成田）へ（13:50着） 名古屋（中部国際）へ（13:55着）	朝：○ 昼：機内

宿泊先：

【北京】前門飯店

住所：北京市宣武区永安路75号 電話：010-63016688 FAX：010-63013883

【西寧】小島基地

住所：青海省西寧市五四西路35号 電話：0971-6307870（内線100）、0971-6300193 FAX：0971-6303164

【上海】青松城大酒店

住所：上海市肇嘉浜路777号 電話：021-64433888 FAX：021-64433588

3 プログラムの概要

3-1 日程

全行程の日程表を掲載した。参考として見てほしい。

3-2 参加者

訪中団の参加者は総勢22名で、内18名が初等中等教育に関わる教員や教育委員会関係者となっている。2名がACCUから、2名が文部科学省の職員である。相互交流が基本となっているので、今まで中国からの訪日団を受け入れた実績のある組織から参加者を募っている。

地域別にみると三重、富山、岡山、京都、東京、神奈川と多岐に渡っており、筑波大学附属関係が4名、横浜国立大学附属小学校や私学の関係者も含まれていた。募集要項では、10年程度の教員経験を目安とするように記載があったが、年齢構成も様々であった。

4 事前講義

参加者は訪中する前日に、半日の事前講義を受けた。文部科学省生涯学習政策局調査企画課外国調査係長の日暮トモ子氏による「中国の教育事情について」というも

ので、学校教育制度から教育の普及状況、行財政制度、教育改革の流れに至るまで、資料を基にしたとても有益なものであった。参考となりそうなものを列挙する。

- (1) 2006年に義務教育法が改正された。これは、広大な国土を有し、教育の質を同様に保つことが困難な状況を少しでも解消することがその目的のようだ。特に、内陸部の中国西部地域における義務教育の無償化、教科書の無償化、寄宿舎制度の充実などが含まれている。
- (2) 教科書は、2001年より固定制から検定制へと移行した。検定の内容までは分からなかったが、日本と制度的には共通しており、興味深い。
- (3) 基礎教育(初等中等教育)は教科担当制をとっており、5年に一度の教員研修が課せられるという。また、教員はランク付けがされており、「特級教師」という社会的名声を得られる者の他、四段階に分けられている。その他、ここで多くを語ることはできないが、日本のそれと共通点が意外と多いことには正直びっくりした。特に「総合実践活動」という科目が小学校の三年生から設けられており、「総合的な学習の時間」を彷彿とさせた。

5 総合所見

本プログラムは、現在の中国の教育事情を知るにはまたとない優れたプログラムであると感じた。ほぼ一週間という限られた時間の中にとっても効果的に、また、多種多様な学校訪問が組まれており、実に多面的な経験をすることができた。

また、学校という教育現場を参観するだけでなく、その学校が置かれている地域や環境を含めて体感できたことは有意義であったと考える。学校が学校だけで存在するのではなく、その風土や歴史、文化の一部として子供たちに学びの場を提供しており、反映されたものであるということを強く感じた。逆説的な言い方をすれば、学校というもの、そこで行われている授業のあり方を見ることで、今の中国あるいはこれからの中国が見えてくると言える。

現在、中国で行われている基礎教育の現状は決してほめられたものではない。しかし、翻って日本の教育の現状がどうか問われれば、それも多くの改善の余地があると言えるであろう。教育は常に課題を内包しながら、その課題を解決しようという意欲が活力を生んでいるという言い方もできる。教育が、人が人を育てていくという原点に立ち返れば、時代が変わり、国が変わり、人が変われば新たな課題が常に生まれていくという考え方も

できる。

中国のそれと、日本のそれを単純に比較して得られるものは決して多くはないと思う。そのことに気づくことができ、さらに不易と流行を改めて考えさせてくれたこのプログラムに改めて感謝したいと思う。

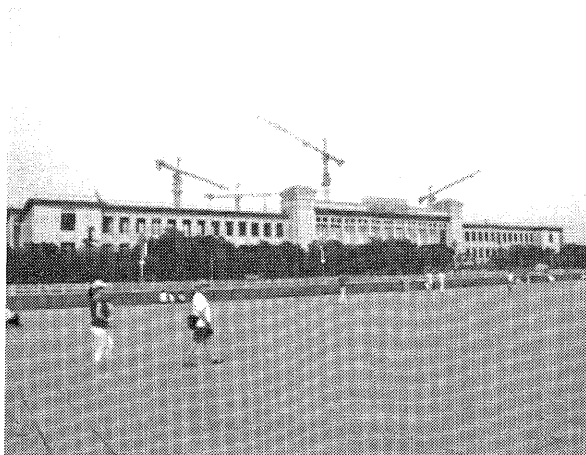
6 主な訪問先

6-1 故宮博物院・天安門広場



故宮博物院は以前、午門から入城したときとはずいぶん異なる印象を持った。景山公園側、神武門から入城するとおそらくは皇帝が目にしていただであろう景色が多かったのではないかと思う。建造物を見ることももちろんだが、その間に広がる空間を身体で感じられたように思えた。

天安門広場では、工事中で遠方からだが中が空洞に見えた中国国家博物館が印象的であった。歴博と呼ばれていた頃から、いろいろとお世話になっている博物館だが、あの膨大な文物はどこに保管されているのだろうかと思議に感じた。



6-2 中国教育部

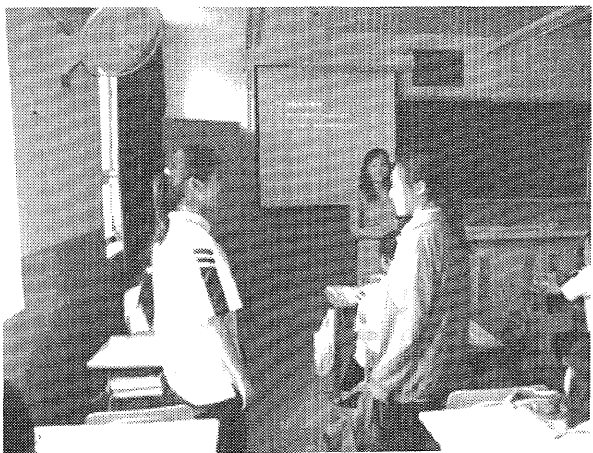
教育部は日本で言うと文部科学省にあたる。最初の表敬訪問であったが、国家を代表する施設として敬虔な趣

を感じた。小・中学校が60万校で2億人という規模は日本からすると想像を絶するものと思う。教科書が日本の検定制に近いものであったり、教師の質を向上させるために様々な施策を講じていたり、熱意を持って語る一言ひとことが印象に残った。

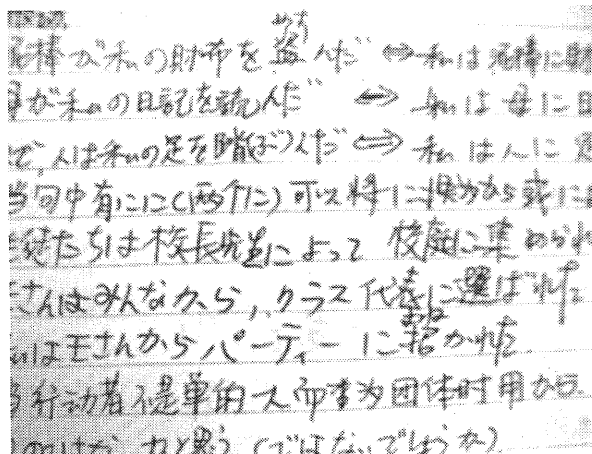


6-3 北京市月壇中学

高一の日本語の授業を参観した。中国では中学というと日本の中学校と高等学校を指す。初級中学と高級中学という言い方もしているようだ。この中学は日本語や日本理解に力を入れているという。授業の始めに、四川大地震と岩手宮城内陸地震について触れ、そこから導き出されるキーワードを使って文を作る作業は生徒の身近な話題からのアプローチで工夫が感じられた。教師、生徒とも想像より日本語に長けており、レベルの高さを感じた。生徒が25名程度という少人数で行われていること、プロジェクタを使用しての発問の提示などが印象的であった。



この授業では、会話が中心であったため、生徒が文字を書いている場面には出会えなかった。そこで、一人の女子生徒に許可をもらい、彼女が書いているノートの一部を撮影させてもらった。日本語を学び始めて3年という生徒のものだが、いかがであろうか。



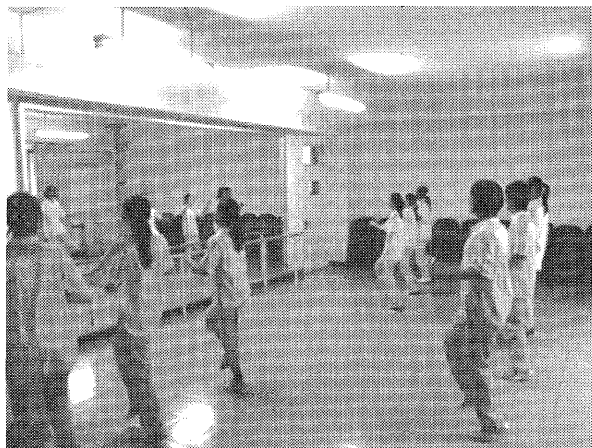
授業を参観の後、講堂にて学校紹介と記念品交換が行われた。記念品として、書軸をいただき、それは本校（書道研究室）の所蔵とさせていただいた。「黄河之水通江戸珠穆峰連富士山」と書かれており、「黄河の水は江戸に通じ、チョモランマの峰は富士山に連なる」という、中国と日本の友好を詠んだもので、端正な好ましい書体で書かれていた。

訪問の後、月壇中学の教員と昼食を共にする機会を得た。授業を参観させていただいた教員は、大学で日本語を習ったものの日本を訪れたことはないということだった。しかし、ことわざや微妙な言い回しについても理解度は高く、レベルの高さを感じた。

6-4 北京市35中学

ここでは、クラブ活動を見せていただいた。クラブといっても教育課程に位置づけられているもので、いわゆる正課の活動となる。指導しているのは外部講師ではなく、正教員である。つまり、この学校の教師になるには、教科だけでなくクラブも一つ教えることが求められているのだ。たとえば、数学と料理というように。

中等部では、手芸・ロボット・美術・生物・電気・プレゼンテーション・ダンス・料理など様々なクラブ活動が用意されており、学校側の考える、知識だけでなく感性や個性を重視した総合的な教育活動が行われていることがよく伺えた。



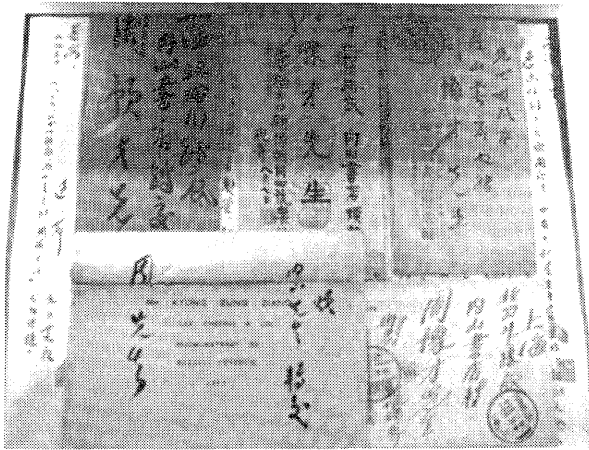
高等部では、歓迎の意味を込めたプラスバンドのレベルの高さを実感したが、四川から避難してきたという中学生のサクソにも感動した。また、「川の流れるように」「世界に一つだけの花」「さくら」など日本の楽曲も多くあり歓迎の気持ちがよく伝わってきた。



夕食は、日ごろ生徒が使用している食堂でいただくことができ、よい経験となった。

6-5 魯迅記念館

魯迅の文学的な側面については多くを知らなかったが、多少、日本での活動などを含めて知ることができた。旧宅は思ったより質素な印象で魯迅の人格の高さを感じるに十分なものと思った。訪中する前、友人から、上海の魯迅記念館収蔵の対聯の複製を見せられていたこともあり、その筆跡も面白く拝見したが、年齢を重ねても大きく変わらないその姿や、細かで丁寧な筆運び、そして絶筆とよい勉強となった。



6-6 西単・奧運場鳥巢

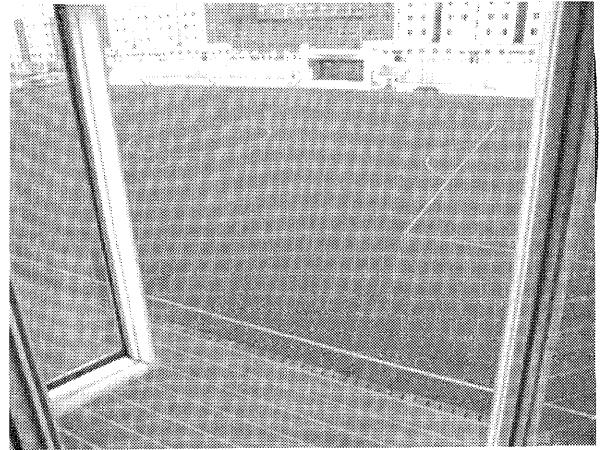
北京では、様々なところでオリンピックが近いことを感じたが、ここはその象徴的な施設であり、遠方ではあったが見ることができてよい思い出となった。

6-7 西寧教育局

どの表敬訪問でも感じたことだが、熱烈歓迎のことは

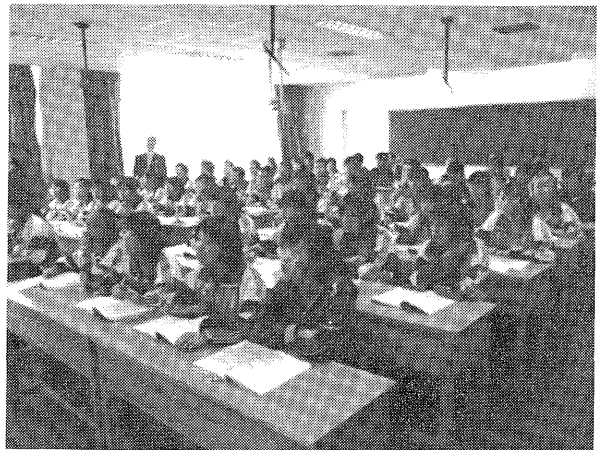
に違わない心のこもった対応を感じた。「日本の教育は世界のトップレベル」ということばには、多分に社交辞令が含まれようが、ハード・ソフトとも教育の質を高めていこうという意思が感じられた。

6-8 西寧第三中学



西寧第三中学は、西寧市でもモデル的な学校ではなくごく平均的な学校であるという説明があったが、とてもそうは思われぬような充実した設備で教育が行われているという印象を受けた。個々の専門教室もさることながら、校舎から見下ろす陸上競技場とあってよい広大な校庭には驚かされた。

高校の語文の授業を参観したが、生徒数は52名と多い。パソコン、プロジェクタを多用した教師の主導によって進んでいく授業は中国の教育のあり方を象徴的に示しているように感じた。



6-9 西寧行知小学

小学校ということもあるのであろうが、歓迎の演武が様々と用意されており、とても楽しませていただいた。音楽に続いて、南画や書の披露もあり、児童が筆で文字を書く姿は訪中後初めてであったので、逆に新鮮な気持ちで拝見させていただいた。授業参観もいくつかしたが、口琴（ハーモニカ）が特色教育と教えていただき、納得

した。私事で恐縮だが、写真に写る女の子の書に答える形で、「中日友好」を書かせていただいた。



6-10 西寧特殊教育学校

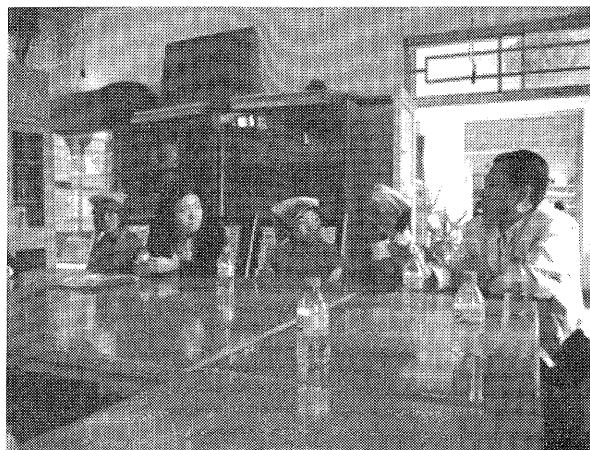
視覚・聴覚・知的障害という特別支援教育を行っているということだが、児童・生徒はとても明るく好ましい印象であった。参観した授業も多種多様で、授業で書道を扱っているのは初めての見学だった。いわゆる手本として何が使われているのか興味があったが、定番としてよい「九成宮」「多宝塔」だった。また、学校紹介の記念室において団長に続いて記帳できたことはよい思い出になった。



6-11 互助県民族中学

互助県民族中学では全員が学生寮に入っており、中学生でも週末にしか帰宅しないということだったが、生徒たちは何しろ明るく元気という印象であった。少数民族が8割を越えるという、日本では考えられない教育環境だが、学校の役割を人材育成においているということば通り、充実した教育が行われていることが伺えた。

ここでは、何といっても生徒たちと懇談の時間がとれたことがよかった。授業参観や教員からの説明で分かることもあるが、やはり生徒たちのことば、双方向性は貴重と感じた。



6-12 互助県教育局

非常に自信を持って教育に携わっているという印象を受けた。不勉強のため、法に基づいた民族教育というのがよく理解されていないが、これも日本ではほとんど考えられないことだが、宗教の枠を越えてお互いが認め合った中で共通の目標を持つことは、そう容易ではないのでないかと思った。

6-13 林川郷水洞小学



少なくとも、インフラの面では今まで訪れたどの学校とも比較することさえはばかれるような学校であった。訪れたときこそ穏やかな日であったが、厳しい自然の中、作物収穫量も少ないという。驚いたのは、一人あたりの平均年収で、500元（日本円で8000円程度）という。それでも、子供たちの眼はどこまでも澄んでいた。パソコンもプロジェクタもない狭い教室で行われている授業だが、とても人間的、あるいは原点を指し示すような印象を抱いた。

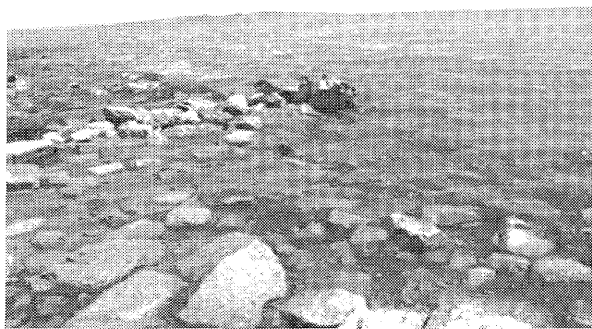
これまで、会話や生徒全員で唱和するような場面には多くであったが、生徒自身が筆記用具を持って文字を書く姿は見るができなかった。小4の語文の授業で15人が、鉛筆を用いて文字を書く練習をしていたが、驚くべきことに全員の執筆がほぼ正確であった。



6-14 青海省教育厅

広大な国土を持つ中国だからこそ、あるいは民族や宗教を越えて教育のあり方を考えていかなければならないからこそ、日本に比べて地方政府の重要性が大きいのではないかと感じた。

6-15 青海湖



湖はとても美しかった。地図で見ていた印象を遙かに越え、確かに青い海であった。標高3300メートルにも及ぶチベット高原は、2500メートルの山にしか登ったことのない私にとって未知の経験だったが、よい天候にも恵まれ、よい経験をすることができた。

6-16 小島基地

日本人が中国の、しかもチベットの入り口といってよい西寧の地でこのようなホテルを造り、大学を始め留学生を受け入れて続けているということを知り、まさに頭の下がる思いがした。おそらくは、こうした民間レベルの地道な活動がこれからも大切なのではないかという思いを強くした。

6-17 上海市教委

上海では教育の現場に触れることはできなかったが、大きく変貌した街を見るといろいろと知ってみたいという思いがした。バス移動の最中、案内の教育委員会の方から上海教育事情の説明があり、上海は高校進学率が98パーセントと他の都市や地域に比べて高く、大学への進学率も高いことが話された。

7 本プログラムの成果と今後

当初考えていた、中国の児童・生徒の書字の状況については多くを得ることができなかった。これは、思いの外、参観した授業において児童・生徒が文字やことばを書くという状況がなかったことが主たる原因である。授業によっては、プロジェクトを見て進めていくものも多く、そういった授業ではテキストはあってもノートが必要とされていないことも多い。ノートや筆記用具自体があまり目につかなかった。重ねて、ほとんどが横書きで、縦書きがされることがない。日本の教科書が国語などではまだ縦書きであるのに対して、中国ではすべてが横書きであった。書字の機会と書字方向は、文字の書く能力の育成に大きな影響がある。今後の中国が、文字を手書きすることをどのように捉えて、どのような方向に進んでいくのかを注意深く見つめていきたい。

西寧市のある高校では一斉に文字を書き始めた際、確認した24名のうち執筆ができている者はわずか2名。鉛筆を使用している者は皆無で、そのほとんどが先の細いペンであった。比べて、貧困地域の小学4年生15名はそのほとんど全員がしっかりとした執筆を身につけていた。一瞥しただけでは何の判断も下せないが、書字機会の確保と使用する筆記用具、低学年からの意識的な習慣づけなど検討に値するような要素はいろいろと考えられそうである。文字を書くという行為が、人間としての基礎・基本の一つであるということを容認するのなら、これらのことが示している示唆は大きいと言わざるを得ないだろう。